

## ブーニン、イワン・アレクセーエヴィチ

Бунин, Иван Алексеевич (1870-1953)

ロシアの作家、詩人。零落した貴族の名家に生まれ、幼少期はオリョール県近郊の領地で過ごす。エレツのギムナジウムで学ぶが、4年半で退学。その後はナロードニキ運動に参加していた兄による教育を受ける。

詩「ナドソンの墓前で」(1887)で詩人としてデビュー。勤めていたオリョールの通信社から、1891年に最初の詩集が刊行される。同じ通信社で働いていたヴァルヴァラ・パシチェンコとの恋は、後の作品に反映されている。



幼少期を過ごした領地



ブーニンとヴァルヴァラ、1892年

1890年代末からペテルブルクやモスクワで交流を広げ、本格的に文学活動を始め。1898年に最初の結婚をするが、2年で破綻。ロングフェローの『ハイアワサの歌』の翻訳(1896)と詩集『落葉』(1901)が評価され、1903年プーシキン賞を受賞。1909年にもプーシキン賞を受賞し、ロシア科学アカデミーの名誉会員にも選出される。

1890-1900年代の創作は、ロシアとその自然を描いた詩や哲学的抒情詩など詩作が中心で。散文も短編「アントーノフカ林檎」(1900)のように、緻密で詩的な感覚表現が際立っている。



1902年頃《水曜会》のメンバー

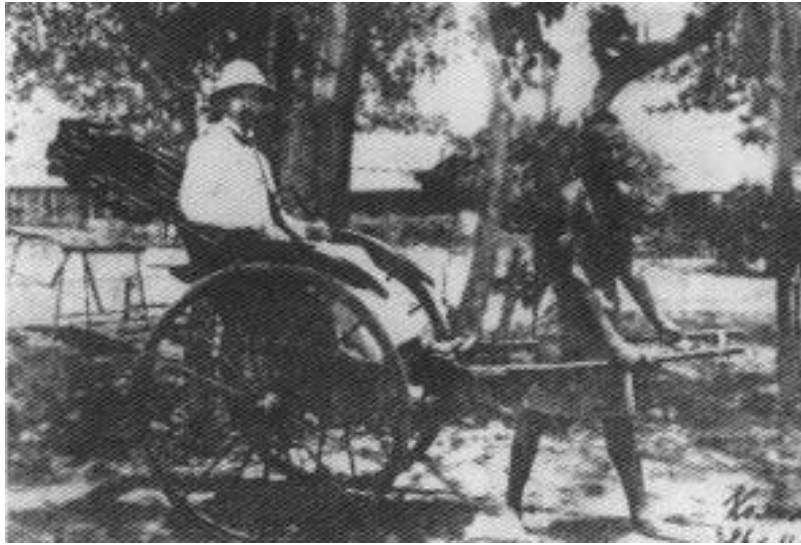
手前の列左から L.アンドレーエフ、F.シャリヤーピン、ブーニン、N.テレシヨフ、E.チリコフ  
後方左から S.スキタレツ、M.ゴーリキー

散文作家として広く認められるようになるのは、1905 年革命前後の農村を描いた中編『村』(1910)による。これ以降、中編『スホドール』(1912)、「兄弟」(1914)、「サンフランシスコから来た紳士」(1915)、「恋の文法」(1915)、「軽い息」(1916)など多くの短編を執筆、テーマもロシアの現実、人間の生と死、愛など広がりを見せる。

1906 年には、生涯の伴侶となるヴェーラと出会っている。



1900 年代 ヴェーラとブーニン



1911年セイロンにて

1900年代から1910年代初めに、ヨーロッパ各地のほか、中東、セイロンを訪れている。これは歴史的過去への旅であり、詩的旅行記『鳥の影』（1908）はその印象にもとづくものだ。

1917年のロシア革命を嫌い、20年にフランスに亡命。自宅で若い文学者らの面倒を見た。そのうちの一人ガリーナ・クズネツォワとの恋は、ブーニンに大きなインスピレーションを与えた。



南仏のグラスにて 左からガリーナ、ブーニン、ヴェーラ

亡命後の作品は、詳細で鮮明な描写、簡潔な語りを特徴とし、記憶や愛、死といった永遠のテーマを扱っている。

1927-39 年には、自伝的要素を含む長編『アルセーニエフの人生』を執筆、それ以外に中編『ミーチャの恋』(1925)、短編「日射病」(1926)、「エレーギン少尉の事件」(1926)など、恋愛をテーマとした作品を多く残した。短編集『暗い並木道』(初版 1943、完成版初版 1946)でも、一瞬の中に永遠の輝きを宿す恋が描かれている。

1933 年、ロシア人として初めてノーベル文学賞を受賞。死からの解放という視点からトルストイを捉えたエッセー『トルストイの解脱』(1937)のほか、未完のエッセー『チェーホフのこと』(1955)も有名。



1933 年ストックホルム



パリ郊外のサント・ジュヌヴィエーヴ・デ・ブアの  
墓地のブーニンの墓